

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 談話室 問伐体験が開く世界

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柿沼, 秀雄, Kakinuma, Hideo メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000071">https://doi.org/10.57529/00000071</a>

## 間伐体験が開く世界

柿沼 秀雄

岩手県紫波町の山林を舞台に、手弁当で、学生中心の間伐体験が始まったのは2004年（平成16年）9月のことだ。間伐に最適の時期とは言い難いが、夏休みを使う以上晩秋というわけにはいかない。爾来、この取り組みは、「紫波みらい研究所」と「森木会」（学生の自主組織）とが共催する「國學院大學・里山づくりプロジェクト」として継続し、11年の歳月を重ねている。持続の背景に何があるのか、そのほんの一端だけ記しておきたい。

地元住民や盛岡周辺の森林ボランティアは別にして、東京の大学から夜行バスで参加した学生や教職員は皆初心者だから、最初は地元林業家による丁寧な作業の道案内が欠かせない。それは、2枚の模造紙に図示した「枝打ち作業のしかた」と「伐採作業のしかた」を用いた講義と模範作業を組み合わせたプレゼンテーションで、今思い返しても要をえた巧みなガイダンスだったと思う。お陰で「よい枝打ち」や伐採する際の「受け口」「追い口」の切り方と「つる」の残し方、「伐倒の方向」や伐倒に当たっては木の高さ（25〜30メートル）以上離れることなどの基本と原則を、作業現場の山林でしっかり学ぶことができた。

現場の多くは30年以上も手が入らなかった杉の山林だ。山仕事ができるように長袖のシャツにヘルメットを被り、腰には片刃の鉋と小型の横引き用鋸を帯いて雑木の除伐と間伐の作業に入っていく。まずは、斜面での仕事がしやすいように周りを整え、足場をしっかりと安定させる必要がある。伐倒作業では、倒す方向にあわせて木の直径の3分の1から4分の1まで鋸で水平に切り込み（下切り）を入れ、30〜45度の角度で鉋を使って斜め切りして受け口をつくる。その

後、幹の反対側から受け口の高さの3分の2ほどのところに、鋸で水平に切り込みを入れ、リズミカルに「引くときに力を入れて」追いつきを切っていく。力任せにやってもうまくはいかない。追いつきは直径の10分の1ほどの「ツル」を残す。そこを切り込みすぎると、木は自分の重さで、思いがけない方向に勝手に倒れてしまう。木の高さ以上に作業仲間が離れていることの大きさが強調される所以だ。

枝打ちの作業では、低い枝を落とすのは腰の小型鋸で足りるが、届かない枝は高枝専用の鋸を使う。高枝用は二段三段と継ぎ手が長くなるほど重く、上を仰いで作業は慣れないと腰がふらついて思い通りの仕事ができない。ここでも力よりも引いて切るリズムとその持続、意識の集中が大切になる。

間伐では自分の体と向き合い、木と対話し道具の声を聞く能力こそが求められる。「木の息」と「鋸の息」と「自分の息」、三者三様の歴史的時間と自然的時間の出会い方は絶妙だ。教室の座学に固有の制度化された文字記号の世界とは違って、対話型のもつとも原初的で多声的なりテラシーの存在に気づかせ、開示してくれる世界がここにはある。大事なのは、人口に膾炙する「コミュニケーション能力」などの手前にある普通のリアルな能力なのではないか。

(教育学)

